

はるかな国へ

見逃される方も多いと思うが、西武新宿線の下落合駅から高田馬場へ向かう左側に、ほんの一瞬川が見える。道路と鉄道に挟まれてその上流も下流も暗渠になっているのでわかりにくい、あそこが神田川と妙正寺川の合流的、地名の由来となった落合である。

この落合という地名の由来を小学校に上がったときに習った。合流点は小学校の通学区の端に位置していたし、比較的大きな通学区で私はその反対側に住んでいた。どうしても川の合流するところを見てみたいと思ったので、ある日曜日、まだ1年生だった私は、自分の目で合流点を見るためにそこまで行ってみることにしたのである。一種の冒険に出かける気持ちであるが、それがどのくらいの冒険かということは、今はもう伝わりにくいかもしれない。私の家は、当時東京にも多く残っていた未舗装の私道の中ほどに位置する小さな町工場だった。路地の長さは50mもないと思う。路地以外のところへ出たことがないわけではなかったが、すぐ近くの幼稚園へ通っていたので、町工場の中と路地を出て右に曲がった酒屋の前から幼稚園までの道が私の活動範囲だった。買い物に行く母に連れられて池袋まで行き、食堂で何か食べさせてもらうこともあったが、それは特別なことで非日常の世界である。そのころもうすでに、東京の山の手には典型的な中産階級・サラリーマンの家庭が広がりつつあり、私が通うその幼稚園にもそのような家庭の子供が多かった。彼らは当時としては比較的裕福で、今と同様に機会あるごとに家族旅行を楽しんでいたようであった。それは私にとっては別世界であり、町工場と短い路地が当時の私の世界のすべてであった。未知の世界へ行くという意味で冒険なのであるが、もう少し違った意味もある。あの「たけくらべ」に描かれていた子供の世界が当時はまだあったのである。私道沿の住宅に住む子供たちは、その向こうの路地の子供たちと何かにつけて争っていた。子供たちの世界でも年少に属するわたくしが、いくつもの道を通って一人で1時間以上も歩いていくのは、それだけでもう大きな冒険なのである。

兄が教えてくれたように、小学校の校門をとおり過ぎると長い下り坂がつづいていた。住宅街を貫く細い静かな下り坂を抜けると、やはり兄が言ったとおりにぎやかな大きな道があり、右に曲がって警察署の前を通って、ようやく西武線の踏み切りに出る。そして線路沿いに歩いて駅を超えて、あの合流点に出た。

当時、川は暗渠になっていなかった。合流点から上流を見ると、神田川も妙正寺川もはるか向うから流れてくるように見えた。耐えることなく連続して流れる水を追いながら下流側を見ると、神田川はさらに遠く高田馬場の向うまで、はるか遠くへ流れ去っていく。私は納得した。あの私道の外側にも連続した世界が広がり、川は絶え間なく流れていき、はるか彼方へと連なっているのである。そしてさらに流れてやがて海へつらなり、その向うには話に聞いた外国というものがあるにちがいない。私はこのとき初めて、私の外側に連続的に広がる「世界」というものを実感したのである。

その時、突然、とても強い感情に襲われた。恐れや悲しみにかかなり近い感情であるが上

手に表現できない。似たもの探すとすれば、初めて学会講演をする直前の不安な気持ちに似ている。あの私道の中ほどにある町工場の中では、私は最年少者として可愛がられていた。幼稚園や小学校から帰ると、工員さんや女の人たちが遊んでくれた。3時にはおやつを少しづつもらい、抱き上げられて肩車をしてもらった。カズエさんも、ハナダさんも、ミッチャンも、ツジドンも、テイリョウさんも、ムーチャンも、モッチャンもみんな遊んでくれた。やわらかく暖かい世界である。だが、その時私の眼前に広がっていた「世界」は、もっと荒涼としてとらえどころのない漠とした世界であった。私は自分の住んでいた「世界」の小ささを知った。そしてその世界の人々の肌のぬくもり手の暖かさを思った。そして、たまらなく悲しくなった。

その晩から私は、眠れない夜があることを知った。やがて大人になって、実際に私が本当に外国に行ったのは、ずっと後のことで、すでに30歳を過ぎていた。その時にも強い感情的な体験をするのであるが。そのことは別の機会に書くことがあるかもしれないが、本質的な意味で私が始めて世界というものの存在を知ったのは、この子供のときの小冒険旅行によってであったと思っている。

(20050224)